The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	労働における観想的契機について : 初期ヴェイユの時代批判から
Author(s)	鈴木, 径一郎
Citation	メタフュシカ. 2015, 46, p. 73-84
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54516
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

労働における観想的契機について――初期ヴェイユの時代批判から

鈴木径一郎

1．ヴェイユの理想社会における労働と観想

シモーヌ・ヴェイユは、初期の論考『自由と社会的抑圧の原因をめぐる考察』（1934 年）[1] の第三章において、理想的な社会状況を提示しているのだが、その理想の社会において達成されるべきことのひとつに、日々の労働のさなかにおける思考活動の実現、あるいは、一種の観想的な契機の実現がある。

古代ギリシアからつづく西洋思想の伝統の内にあっては、観想活動――知性によって存在を観てとること――は基本的に、余暇において、つまり、労働をしていない時間においておこなわれる活動である。それはまた、人間における至高の活動であり、一種の快をともなう享受的な活動であって、幸福論的観点からは、観想の活動のためにこそ、われわれは余暇を確保する必要があるということになる。そして、この枠組みにおいては、労働はあくまで、余暇の確保のために別途おこなわれる、二次的な活動である。

しかしヴェイユのこの論考においては、われわれの精神のおこなう観想的な契機をもつ思考活動が、伝統的な枠組みと同様に、人間的な生のための無二の活動としてあつかわれつつ、同時に、ある意味では労働のあいだにもおこなわれうるし、おこなわれなければならない活動ともされているのである。その理想的な生活において、思考活動と労働活動は別の時間に割り振られてはいないのである。

これには自由の問題がかかわっている。人間的な生をいうのであれば、われわれは隷従を避け、自由でなければならない。それは、現代的な生活において日々の多くの時間を捧げなければならない労働の場面においてもそうである。そして、この文脈でヴェイユが問題とするのが「真の自由」としての「思考と行動の関係」における自由である[2]。この論考であつかわれる自由とは、行

1　Weil, S.（1955［1934］）. *Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression social.* Paris, Gallimard, coll. « Idées ». 引用箇所については邦訳（ヴェイユ『自由と社会的抑圧』冨原眞弓訳、岩波書店、2005 年）を利用した。

2　同書、84 頁。

動を自分自身の思考に服せしめることであり、それは、従わなければならない必然からの解放ではなく、むしろ、行動における、必然の必然としての享受なのである。そして、理想状況への前進、つまり、生活における自由の場面の拡大（すなわち隷従の場面の縮小）は、必然からの解放ではなく、行動に必然の把握の伴う場面の拡大となる。

これは、人間の欲求の問題であるということもできるだろう。ヴェイユは、この自由な行動への欲求、行動における知的な把握の欲求、行動における必然性の享受の欲求が、ひとりひとりの人間がおのおの、いつも満たされてあるべき、あるいは満たそうとしてよい、正当で基本的な欲求の一つであるといっているのである。労働における、ある成果を得るための行動に際しても、われわれは、自らのおかれた状況を思考によって、目的までの必然の連鎖として構想することで、その構想を自身の精神のうちに把握し、精神の了解を得ながら行動できてよい。

しかし、ヴェイユは労働がどうしても避けられないものであるから、次善の策として、それを人間にふさわしいものにするというのではない。たしかにヴェイユは労働を避けられないものであるともするのだが、彼女はむしろ、労働の無い生に人間は耐えられないだろうと想定している[3]。ヴェイユにおいては、労働は、尊厳ある人間の生活のうちに、それ自体として価値をもって位置を占めうるし、そうならなければならないものである。

ヴェイユの理想社会――彼女はそれがあくまでたどり着けない「ユートピア」であると自覚しているが――には、人間が媒介無しに、あるいはより正確には、十分理解し統御できる道具のみを介して（熟練して柔軟になった肉体もそのような道具の一つである）[4]、自己の環境たる自然、つまり、宇宙と対峙する、肉体労働を中心とする文化が想定されている[5]。このとき労働は、労働する者に、宇宙を対象とした知的な把握を要求することになる。またこのような労働は、人間自身による自己の運命の創造として[6]、それ自体として価値ある活動であり、決して二次的な活動ではない。

つまり、この論考におけるヴェイユは、精神による宇宙の知的な把握を人間的な生の最重要の価値とするという点で、ギリシア的な観想の生の理想をうけつぎつつ、その観想的な活動の中心となり、モデルとなる場面を、余暇ではなく労働の実践の場面とする、いくらか新しい理想の提示者なのである。

もちろん、これは、ヴェイユがはじめて示した理想であるというよりも、歴史の過程が形成してきたという類のものであろう。ヴェイユはその理想における労働の称揚については、「人間的な価値としての労働の観念は、ギリシアの奇跡以来、人間の思考がなしとげた唯一とおぼしき精神的成果である」[7]と述べ、また、「この観念を明らかにした最初の人間」[8]としてベーコンをあげている。

3　同書、82 頁。
4　同書、92 頁。
5　同書、111-115 頁。
6　同書、86-87 頁。
7　同書、116 頁。
8　同所。

太古の絶望をもたらす「創世記」の呪詛は、世界を徒刑場として、労働を人間の隷従と悲惨の刻印として描きだしたが、ベーコンはこの呪詛にたいして、天才の一瞬の閃きのなかで、「人間は自然に服しつつ自然に命じる」という人間と世界をつなぐ関係性の真の憲章をもって代置した。かくも簡明なるこの公式は、これだけでもわれらの時代の聖書たりえよう。真の労働、すなわち自由な人間による労働を定義するにはこれでたりる。ただし労働が必然への意識的な服従行為であるならばという限定つきで[9]。

われわれは、自然に従ってしか、自然を征服して成果を得ることができない。ベーコンの自然研究のための公式が、ヴェイユの「真の労働」の公式である。そして、それはヴェイユにおいて、「必然への意識的な服従行為」として、あくまで自由な行為なのである。ここで「意識的な」というのは、その服従行為である労働をおこなう個人が、自分自身の思考によって必然の連鎖を構想し、それを精神のうちにありありと把握していることを意味するだろう。自らが把握する必然に服従して行動するとき、その行動は自由であって、人間が避けるべきものである隷従ではない。むしろ隷従とは必然の連鎖を把握しないまま、偶然にまかせて行動することであり、それは自分の恣意に従うときでさえ、それが恣意である限りはそうである。ヴェイユにおいては、しなければならないことから解放されたという意味で「自由」な、余暇のある人間が知的活動をおこなう、というよりは、しなければならないことに巻き込まれつつ、それを自らの思考によってしなければならないことと理解している、その状況と行動の必然の連鎖をいま把握する人間こそが、いま知性を働かせ観想する人間こそが自由な人間なのであり、そのように必然を把握し享受しつつ、把握している必然への服従としておこなわれる行動こそが自由な行動なのである。そして、その理想社会においては、協業や分業という集団的な活動の場面についても、このような自由な行動がひとりひとりに可能でなければならない。

２．自由な行動と思考の享受的側面

ヴェイユは、労働自体を自由な行動にするという課題をわれわれに示した。

しかし、必然を精神のうちにありありと把握しながらおこなう行動が自由な行動であり、理想であるとして、それは人間の労働の場面において、現実的にはどの程度可能なのであろうか。

ここで、本稿においては、自由な行動の実現の程度を左右するいくつかの条件について考察するために、人間の思考活動の努力的で作業的な面と、享受的な面について、区別しておきたい。つまり、状況を必然の連鎖として構築する、より能動的で、場合によってはかなりの時間のかかる組み立ての面と、その構築された必然の連鎖を精神の内に一挙に見てとる、より受動的で瞬間的な受け取りの面の区別である。

もちろん、実際の思考活動においては、それらの両面が絡み合いながら進んでいくはずである。何も見てとられていないところには、思考の始まりもないだろう。いますでにある程度把握され

9　同所。

ている状況が、思考による状況の構築の作業を促し助け、その構築の作業が、見てとられる状況の精度を高める。しかし、享受的な面は思考の過程のさまざまな段階に、さまざまな精度でありつつも、やはりある種の達成であって、到達されないこともあるものである。思考の構築の努力は必ずしも、明晰な状況の把握をもたらすところまで到達するとは限らないし、明晰さへのわずかの進展すら感じられないこともあるだろう。

また、行動のまさにそのときの自由が問われるならば、思考の享受的な面の能力の限界が、単独で決定的な問題となりうる。というのは、ひとりの人間が、思考して必然の連鎖を構築することに成功しつつ、差し迫った行動の瞬間には、その連鎖があまりに複雑であったり広大であったりして、十分に把握できないということがあるからである。これはもちろん状況の側の問題でもあるが、その状況を把握するわれわれの精神の大きさ、精神の視野の問題でもある。

つまり、行動における必然の把握については、把握されるべき連鎖の規模や複雑さが一方の条件であり、把握する人間の精神の限界がもう一方の条件となるが、後者について、その思考の活動における構築的な面の能力と、享受的な面の能力が、それぞれ区別されて単独で条件となりうるのである。

また、思考活動の分離、思考の成果の客体化の可能性も、われわれの自由な行動を制限する条件としてふれておかねばならない。われわれは、労働の場面において、実際に行動をおこなう際に、まさにその瞬間には必然の連鎖を把握しそこないつつも、ある意味みごとに、必然に従いながら方法的に行動を遂行し、目的にたどりつくということがある。われわれは、必然の享受無しに、意識しないまま必然に従って、その達成する成果としては十分な行動をとることができるのだ。そして、現代社会におけるこのような情景にはしばしば、思考と行動のへだたりの可能性、ある種の思考の客体化の可能性が関係しているのである。

労働における自由の実現の、実際上の難しさについてヴェイユがあげる理由のひとつは、「理論的思弁と行動を隔てる深刻な本質的差異」[10] である。問題は思考の活動と思考に従う行動とは別のものであり、それぞれが独立しておこなわれうるということにある。

> なんらかの労働がすぐには克服しえない困難を思考に提示するとき、困難の検討と労働の実践を統合するのは不可能である。思考はまず自己の流儀にのっとって理論上の問題を解決せねばならない。その後に、解決策が行動に適応されうる。これでは行動が本来的な意味で方法にもとづくとはいえない。方法に合致してはいるが、似て非なるものだ。相違は根本にかかわる。方法を適用する者は、適用の瞬間に方法を構想する必要がないからである[11]。

思考によって把握された必然の連鎖から解決策が、つまり方法的な一種の命令が構想されて適用されるが、解決策の構想者と適用者は別々でありうる。そのとき、構想者は自身の精神のうちに必然の連鎖を構築し把握したかもしれないが、適用者はその連鎖を把握しないまま、必然の感

10　同書、93 頁。
11　同所。

覚を享受することなく、解決策として客体化された方法に従って行動しうる。これが労働におけるある種の分業を可能にしているのだが、これは、思考活動と、その思考の結果の行動への適用との時間的なへだたりの可能性として、根本的な問題であって、ひとりの同じ人間が思考し行動する場合にも問題になる。

> 複雑な事例ともなると、たとえ自分で練りあげた方法であっても、適用される瞬間にその方法自体を構想するのは不可能である。なぜなら注意力はつねに方法が実践される瞬間にむかわざるをえないので、実践の総体が依存する諸関係の連鎖を同時に把握することはできない。したがって、実践されたのは思考ではなく、一連の動作を指示する抽象的な図式であり、実践の瞬間において精神の了解を得にくい点では、純然たる型仕事や呪術的な儀式にもとづく処方と選ぶところがない[12]。

われわれが、一度は自分自身で「諸関係の連鎖」を構想し、そこから方法を導きだしたとしても、実際に行動するときには、精神のうちに従うべき必然をありありと感じられるとはかぎらない。しかし、行動の際に、この享受的な面がなくては、それは自由な行動とはいえないだろう。それがわれわれの把握を逃れ、もはや必然と感じられないならば、われわれは、過去の自分自身が十分にみごとに立てた計画にも抑圧を感じるものである。

まとめれば、必然を把握してそれに服従する自由な行動の条件は、一方では必然を把握する個人の思考の能力であり、もう一方では、その行動において把握されるべき必然の連鎖の規模と複雑さである。しかし、思考の能力については、その作業的面と享受的面を区別するならば、それぞれが独立して条件となる。たとえ、複雑な諸関係の連鎖の構築に成功しても、それを行動する際に必然として享受できなければ、それは自由な行動とはいえない。そして、思考活動と思考の命令に従う行動が独立してありうるということは、行動の自由と行動の成功は必ずしも関係がないことを意味する。行動の成功のために行動者が諸関係の連鎖に結果として服従していることが必要であるとしても、その連鎖についての、行動者による必然としての意識的な把握、その必然性の享受は行動の成功の条件ではない。つまり、必然の享受が行動者の欲求であるとしても、その欲求は成功の観点からは問題にならない。

かくして、労働における自由な行動の実現は、実際の場面においては、人間の思考能力の限界と、扱わねばならない状況の無限の広大さと複雑さによって、理想的なレベルでの達成はそもそもが困難であるだろうが、さらに、その行動が自由であることが行動の成功の観点からは必要がないということによっても、自由がむしろ、社会において求められる成果と対立するときには、分業における思考活動の切り離し、機械化、ルーチン化等、その方法はなんであれ、思考の機会の制限というかたちで、その最低限のレベルの達成についてさえ、ますます難しくさせられることになると考えられるのである。

---

[12] 同書、93-94 頁。

３．自由な行動のための状況へのアプローチと「現代文明」

必然を把握した自由な行動の、日々のさまざまな場面における実現という理想に、実際にいくらかでも近づこうとするならば、二つのアプローチが考えられる。それは、労働の場面においても、その他の場面においても同様であるが、ひとつは、行動する個人自身の諸関係を把握する能力と把握の欲求を高める方向であり、もうひとつは、むしろ状況を対象とし、つまり、行動のために把握されるべき諸関係の規模や複雑さを縮減し、また把握の促される機会、思考の機会を増やす方向である。

ヴェイユにおいてはどちらのアプローチも重要なのだが、この論考に関しては、後者の方向、状況の改善の方向が、まずは強調されているようにもみえる。

ヴェイユが 1934 年のヨーロッパという状況の内にあって、理想社会についての理論的ビジョン（tableau théorique）の章につづく、現実のスケッチ（esquisse）の章、「現代社会における生の素描」の章において提示するのは、まずは、量的な「不均衡」の問題である。それは、人間の個人としての能力と、生を実際に左右する条件である環境とのあいだの深刻な不釣り合いであり[13]、その不均衡はやはり、個人の行動の自由についても関係している。

つまりヴェイユは、彼女の時代においては、文明社会――それは個人と自然の間に介在し、いまやそれ自体が個人にとっての環境となっている――の発展によって、諸関係の連鎖の規模があまりに大きくなってしまったがために、労働の場面においてもその他の場面においても、その諸関係の行動のための総体としての把握は、個人の思考の能力の範囲を超えていて、自覚的で自由な行動はほとんど不可能だというのである。

そしてヴェイユは量的な「不均衡」の問題には「集団化」の問題がつづくとする――「個人が制御できぬものはことごとく集団が奪いさる」[14]。ヴェイユはこの「集団化」を、労働、科学、行政、経済と、あらゆる領域で進行しているプロセスとする[15]。個人がその立場を担うべき、思考活動の役割が、いまや、本来的な意味では思考しないものである集団や、自動装置に奪われつつあり、あるいは、もはやほとんど奪われてしまっていて、個人にはその思考のための機会すらなくなってしまっているというのである。

もちろんこれが個人の能力と環境という両項の均衡の問題であるかぎりは、抽象的に考えれば、一方の量的な増加にたいしては、もう一方の量的な増加が対応すればよい。しかし、ヴェイユが指摘し前提とするのは、大きく変化する環境のいくつかの値にたいして、もう一方の項である個人の能力の、主観的には生の尺度となるところの値において、「思考の平均速度」[16]も含め一定不変のものがあるということである。ヴェイユは、個人の能力におけるそれらの値については、どの時代においても変わらない「不変項」[17]として配慮をするべきであったとしている。そういう文脈から、個人の自由な行動の実現、つまり、行動における思考の活動の実現において、個人に

13　同書、119 頁。
14　同書、121 頁。
15　同書、121-125 頁。
16　同書、120 頁。
17　同所。

与えられる思考の機会の問題にくわえて、個人の思考能力と環境の間の量的な問題、不均衡の問題についても、まずは、状況の側の改善が検討されることになるのである。

ところで、産業化の進行する社会における個人の抑圧的状況の分析については、とくに労働の場面についてはマルクスが先駆的であり、個人がその物質的成果の源である自然からはるかに遠く切り離されてあること、あるいは分業の発展や機械の導入が、労働における個人の思考の必要をうばうことについてもすでにとりあげており、その指摘自体は目新しい話というわけではない。

一般的に言って、社会と個別の作業場における生産過程の分業が進めば、ひとりひとりの労働者が配慮すべき部分は、膨大な全体の過程のごく一部になりその全体像の把握は必要ではなくなる。また、集団の組織化や機械化が進めば、労働の対象と操作の諸関係について思考する機会は、その組織や機械を設計する際の一度きりになり、その把握の結果は制度や機械として客体化されてその労働対象に幾度も適用され、多くの労働者から思考の機会は奪われる。そして、これらの生産の形態の変化は、人間の都合や欲求に合わせてではなく、生産性の向上のため、より根本的には、資本の増殖のためにおこなわれることであり、この増殖は人間の欲求と違って限界をもたない。これらはヴェイユの問題でもあるが、マルクスの明らかにしたことである。

ヴェイユのこの論考の立場の着目するべき点は、マルクスとの差異でいえば、ヴェイユは、マルクスの現状の分析については受け入れつつも、その未来予測について、生産性の向上には限界をみており、また生産性の向上による革命の可能性を否定しているところにある[18]。

そうである以上、ヴェイユにおける個人の自由への解放は――彼女が労働の生を否定せず、むしろ理想としていることを抜きにしたとしてさえ――、一時的に抑圧状況を受け入れつつ、生産性の向上という迂回路を通り、最終的には各人の余暇を実現することによって、労働からの解放としておこなわれる、というコースをとることはできない。それはヴェイユの状況の理解によれば、不可能な途なのである。むしろ解放は、労働における自由の直接的な増加によって、つまり、個々の具体的な労働において、個人の思考による必然の把握がおこなわれる局面を直接的に増加することによっておこなわれるのでなければならない。

そのような観点からすれば、マルクスの業績は、むしろ現状の分析自体にある。その提示する未来における解放への希望と切り離されたとしても、生産様式の変化と個人の働き方の変化の関係をとりあげて、その従属関係をいくらか明らかにしたこと自体がマルクスの成果であり、重要なのは、目下の抑圧状況を解放への通過点として、ただ受け入れてしまうのでなく、そこから思考して、つまり、その状況をより詳しく見て、機会を見つけては、そのときに、いくらかでも理想に近い、人間的な生を実現するよう行動することなのである。

とはいえ、われわれには、それしかできない、ともいえる。ヴェイユは、時代の不可避と見える中央集権化の流れもふまえつつ[19]、個人が自由のために、状況にたいして実際にできることはほとんどないし、大きな効果も得られないだろうともいう。

18　同書、第一章「マルクス主義の批判」。

19　同書、136-137 頁。

> それでもなお時流に逆らってでも自己および他者のうちなる人間的尊厳を尊重しようとする者に、なにができるというのか。なにもできない。われわれをうち砕く機械の歯車装置にいくばくかの猶予をもたせ、わずかでも思考を呼びさます機会をあまさずとらえ、政治と経済と技術の領域で、社会組織が個人を囲いこむ種々の絆の内部において、個人にいくらか行動の自由をゆるす可能性のあるものすべてを奨励すべく、力を尽くす以外は。これとて無意味ではないが、さしたる効果は得られまい[20]。

ヴェイユのこの論考は、それ自体として、読者への、自由な行動への呼びかけでもあるだろうが、むしろ、ヴェイユ自身が自由で自覚的な行動をするための、彼女自身の状況の把握の取り組みでもあっただろう。しかし、当時の状況は、彼女が状況にたいしてできることはほとんどないと教えてくれているようなのである。ヴェイユは時代の絶望的ともみえる「素描」を次のように終える。

> 現に生きている世代は、人類史上に連綿と続くすべての世代のなかで、おそらく想像上では最大の責任を、現実的には最小の責任を担うことになろう。この状況は、ひとたび十全に理解されたならば、驚嘆すべき精神の自由を与えてくれる[21]。

4．自由な行動のための個人へのアプローチと「科学」

前説の最後に引用した箇所は一見、諦めの宣言のようにも見える。しかし、ここでの「精神の自由」はやはり、状況の「理解」によるものであり、必然の把握によるものであって、単なる行動からの解放ととるべきではないだろう――ヴェイユが生産性の向上を経由しての革命による脱出の可能性を否定しつつ、時代の絶望的なまでの不均衡状況を描写し、そのうえで、われわれがその状況にできることはほとんどないとするとしても、それは、読者や彼女自身の心を圧倒して、自由な行動を放棄させるためではない。それは、たとえば、革命という「希望」に向けての行動からの解放ではある。しかし、この絶望はその成否はともかくとして――絶望も簡単な作業ではない――、根本的には、希望のヴェールを排した現状の直視の試みであり、そして現状の「直視」は、その深刻な状況でおこなわれうる、ごくわずかな自由な行動のためにおこなわれているのだととるべきであろう。ヴェイユにおいては「見ること」は行動と深くつながっていると考えなければならない。

だからこそ、ヴェイユはその「素描」に続く最終章、短い結論（conclusion）の章で、むしろ、行動への、いくつかのポジティブな提案をあげるのである。それは、現代文明が「人間をうち砕くにたるもの」と「人間を解放するなにか」をともに含んでいる[22]としての、文明の選択的な「継承」に関する提案である。

---

[20] 同書、138 頁。
[21] 同書、139 頁。
[22] 同書、141 頁。

われわれは現今の諸悪にたいして完膚なきまでに無力である。ひとたびこれを明瞭に理解するならば、自身が直接その打撃にさらされる瞬間はべつとして、現状を苦慮する責任はまぬかれる。とすれば、現代文明の財産目録を作るべく尽力し、かかる未来を方法的に準備すること以上に崇高な責務があるだろうか[23]。

肝要なのは、現代文明の中で、個とみなされる人間に権利として帰属するものと、人間に逆らい集団に武器を与える性質のものとを切り分けて、後者にかかわる諸要因を抑制し、前者にかかわる諸要因を発展させようと努めることだろう[24]。

ヴェイユの提案する行動は、その第一の作業としては、文明の整理として、個人というよりは、文明と個人の不均衡状況への、とくに文明側へのアプローチである。しかし、文明の「切り分け」にあたっての前提、選択の基調となる方針は、あくまで生の人間化であり、それはやはり、自由な行動の領域の増加によって、「思考し行動する個人の能力が拡大する」[25]ことによってなされるものである。この作業はそのための「準備」として、現在における未来の状況へのアプローチであり、また、その未来の社会状況を介しての未来の個人たちの能力（capacité）へのアプローチでもあるだろう。

そして、ヴェイユが、その未来の個人たちのために「財産目録」に加えるものの中で注目すべきは「科学」であり、とくに、その扱い方である。ヴェイユは、科学がわれわれを自由へと解放するような力をもちうると考えているのであるが[26]、それには科学のあり方がかかわっている。ヴェイユは、個人としてのわれわれを圧倒するようにではなく、行動へと促すように、その遺産を受け継ぎ、残そうとする。そのとき、ヴェイユはあくまで人間の精神の能力の一定の限界を前提としながら、個人の自由な行動の能力の拡大を目指しているのである。

科学にかんしては、科学が積み上げてきたすでにして膨大すぎる総量に、なにかを追加しようとすべきではない。本来的に精神に属するもの、明晰なる観念で構成されているものに光をあて、調整、統一、要約、ときには発見のための自動的手順にすぎぬものを脇におくことを精神に可能ならしめるために、これまでの成果すべての総括をおこなわねばならない。さらにはこれらの手順じたいを精神の自覚的な働きかけへと連れもどす試みも必要となろう。一般論として、可能ならばつねに、すべての成果を思考に方法的活動をうながすたんなる契機とみなし、そういうものとして呈示すべきである。したがって科学史の真摯な研究が不可欠となろう[27]。（傍点筆者）

---

23 同書、142 頁。
24 同書、143 頁。
25 同書、141 頁。
26 同所。
27 同書、143-144 頁。

ここでのヴェイユの個人の限界の前提は、その「総量」への留意からしても明らかであるが、その前提をふまえての科学の進むべき方向は、ヴェイユが科学の技術的応用の際にも論じている[28]ように「強力化」ではなく、「自覚化」である。科学はそのもたらす物質的利益というより、「理解」によって自由を実現するのである。いまや集団化して、個人の把握を逃れてしまっている科学は、個人の精神の限界を前提として、つまり「明晰さ」をめざして再組織されて、精神の把握の能力、把握の欲求を高めるものとならなければならない。

ところで、この科学の再組織の議論は、未来世代のための準備として、一種の教育論とも読めるし、ある種の「教室」での応用も考えられる。しかし、そうであるとしても、この科学の再組織は、「学校」的な、ある意味では準備的な場での思考活動の実現に留まってはならない。思考の時間と行動の時間が切り離されてはならないのである。科学の再組織は、あらゆる現場のためのものとなるべきだろう。だからそれは労働の現場のための、つまり、実際に自然の事物と対峙する場で技術を用いる人間が、その技術を科学的理解をもって、自覚的に用いて行動するという理想状況[29]のための再組織でもあり、そうでなければならない。そのためには科学の再組織の作業は、たとえば、ひとつひとつの観念の明晰さをめざすとしても、差し迫った労働の場面での応用にたえるようなレベルの明晰さをめざすものとして、より高度なものとならねばならないが、それが望まれるのである。

もちろん、これは理想である。しかし、この、未来世代へのアプローチとしての、科学の継承の問題についても、理想の社会状況へのアプローチとして、「真の労働」の理想との関連から理解されるべきであり、そうしてこそ、ヴェイユの理想における科学の位置の特徴も際立つ。

つまり、そのヴェイユの理想の社会状況にあっては、労働の領域においても個人の尊厳が問われるのであり、労働の活動のまさにその現場においても、かつての誰かの思考の成果が客体化されて再利用されるのではなく、行動のたびに思考が要求され、究極的には各瞬間、つねに必然が把握されてあることが望ましいのであるが、科学も同様に、たんにかつての誰かによって到達された「成果」として価値をもつのではなく、また、精神による把握の無いままの応用によって、そのもたらす物質的利益によって価値をもつのでもなく、「思考に方法的活動をうながすたんなる契機」として整理し継承され、それによって促されてそのときに、あるいはそれに鍛えられてのちにおこなわれる、個人の毎回の思考の活動によってこそ価値をもつのでなければならない。

真に価値をもつのは思考の結果ではなく、毎回の、個人による、実際に自身がおかれた状況を対象とする思考活動であり、その思考によって構想された必然の享受であり、その必然への服従としておこなわれる行動であり、また、それらは切り離されず、一体をなした活動であって、それは、確かに知的な契機をもつ活動でもありながら、その度ごとに新たにおこなわれる、毎回が一回きりのものなのである。ヴェイユは、科学もあくまで、その毎回の、一回きりの知的な活動を促し、その能力を鍛えるものとして再組織されなければならないといっているのである。

しかし、労働の領域にしろ、科学の領域にしろ、この理想の状況へ近づこうとする行動は、労

---

[28] 同書、114 頁。
[29] 同所。

働の生産性の向上、またそれをもたらす科学の強力化のみが価値あるものとして目指されている状況では難しい。そのような状況においては、むしろ、思考の一度の達成が客体化できること、それによって思考の成果を何度も再利用できること、多くの人間から思考活動の労を取り除けることにこそ意義があるのであるから。科学は人間の精神を相手にする「明晰化」よりも、機械を相手にして自動化を可能にするような「一般化」を目指すだろう。労働の現場では、それらの成果の把握抜きの応用だけが推奨されて、個人の把握への欲求は無視され、あるいは矯正されるだろう。とくに現代的な賃労働の現場においては、マルクスが指摘したように、労働者は自分を労働力として商品としたときに、そのこころを向ける方向さえ売ってしまったのだと信じられていているのである[30]。

あるいは、たとえば生産性とは切り離された、科学それ自体の価値を主張するにしても、それが、おもにその知の領域の拡大、新しさによって支持されているだけでは状況はあまり変わらないだろう。人間にとっての、毎回の自由な行動自体の価値、その自由の享受の欲求としての正当性が広く認知され、また実際に欲求されなければ、知的な把握の活動は、その人のもつ物質的余裕の多寡であるとか、能力であるとか、分担された役割を条件として、あくまでそれを許されたもののための特別な活動ということになってしまうだろう。

問題が根深いものであるのは、必然の享受の無い行動になれてしまえば、その感受性と欲求自体がうしなわれてしまう、あるいは育たないであろうことである。自由な行動への個人の能力の拡張のプロセスは、まずは、いくらかでも、精神による把握が実現され、必然として享受されて、あるいは眠っていた必然の把握の感覚、把握の欲求自体が取り戻されるところから始まらなければならないだろう。まずはどこか、できうるところで、観想の試みと、観想とともにある行動の試みがされてよい。そして次にそのような把握を、日々のさまざまな領域で求め、その可能な領域を拡大していくことが、欲求され、検討されることになるだろう。

（すずきけいいちろう　臨床哲学・博士後期課程）

[30] マルクス『資本論第一巻』第三篇、第五章、第一節「労働過程」。

On Contemplative Moments in Labour: From Simone Weil's Early Thinking about Society

Keiichiro SUZUKI

In traditional Western thought, contemplation is the most important leisure activity, and labour is a secondary activity for gaining leisure time. This paper argues that Simone Weil's concept of the ideal society in her early work *"Réflexions sur les causes de la liberté et de l'oppression social" (written in 1934)*, shows a kind of "contemplative moments" in our daily labour.

In Weil's ideal social condition, all individuals must enjoy Liberty. She sees "Real Labour" as the action of a human in and toward the universe, governed by necessity which grasped by the actor's own mind at that very moment, and in that case the action is also liberal and one of dignity.

This paper demonstrates that throughout Weil's observation, the actual condition of our modern civilization is far from her ideal, and argues that the problem is an imbalance between the capacity of an individuals' mind and the complexity of their living condition. One of her approaches towards the ideal is the re-classification of modern scientific knowledge for an individuals' mind. Modern science has the potential power to liberate people, not by its contribution to productivity but by its methodical nature. Its knowledge has to be re-conceptualized to be able to be grasped by an individuals' mind and stimulate individuals into real contemplative thinking towards the universe in which they live. Our first step towards Liberty can be to gain the desire for grasping necessity. For, in our modern daily life, we may have already lost our desire for thinking and grasping necessity.

「キーワード」
観想、労働、自由、科学、余暇